
サブキャラ！

緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サブキャラ！

【Nコード】

N1462B

【作者名】

緋色

【あらすじ】

奇人変人が集まる桜坂高等学校。その中でもよりさらに濃い奴ら、桜坂生徒会メンバーは今日も面白可笑しい一日を過ごします。

第一話 桜坂生徒会

特に自慢できる産業があるわけでもなく、また都会でもなければ田舎でもない。そんなごく平凡で、特徴がないのが特徴である市、樋川市。その樋川市のちょうど真ん中の位置にそびえている高校が、私たちが通う桜坂高校だ。

偏差値はやや高め。部活動はそれなりに盛ん。そしてこの高校の最大の売り文句は自由な校風。対して厳しくもない校則を幾つかお情け程度に作っただけで、それはもはや放置していると言っても過言ではないだろう。生徒による自主性を重んじるなどと言っているが、ただ教師が生徒の管理をするのを面倒に思っているだけなのではないか、と思ったことは一度や二度ではない。しかし、そんなチャランポランな高校でありながら、偏差値が高いためか、高名な生徒会の圧力によるものか、それほど不良と言われる人種は生息していなかったりする。

その代わりに少々奇抜な人種が多様に生息しているのだが。そんな我が高校を私の友はこう言った。

平和だが平穏ではない桜坂。

少し言いすぎなところもある気はするが、大まかなところは間違っていないだろう。そんな面白可笑しい我が高校。その中でも更に奇抜な人種が集まったのが、かの有名な桜坂生徒会だ。とかく言う私も実はその生徒会に所属している。もちろん私は奇抜でも奇妙でも気違いでもない。ごく凡庸な人間だ。こんな私がこの生徒会に入れたのは、偶然に偶然に偶然が重なった後で奇跡でも起きたのだろう。まあ、過程はどうでもいいのだ。結果、私はその生徒会に所属しているのだしな。

ん？どうやら今日もそろそろ生徒会が始める時間のようだ。

一年のあの子が生徒会に入ってから、面白かった生徒会が今まで以上に愉快なものとなった。さてさて、今日は一体何が起きるのだろうか。

ふふふ。今日一日も退屈しなくてすみそうだな。

第一話 桜坂生徒会（後書き）

初めて書いた作品で正直ドキドキです。できるだけ皆さんが呼んで面白いと思う小説を書いていきたいと思っていますので、どうかよろしく願いします！

第二話 今日も変わらぬ生徒会（前書き）

生徒会メンバー全員登場によりちょっと長いですが、どうか読んでみてください！お願いします！

第二話 今日も変わらぬ生徒会

「あ、あの。せ、せ、先輩？」

「ん？どうしたの？」

「か、か、顔が近い気がしなくもないなあーって思うんですけど・・・」

「気のせいだよ」

「き、気のせいって。あ、あ、何で更に近づこうとしているんですか！？」

今日の生徒会室もやはりいつも通りだ。

扉を開けてまず目に入った光景は日々、生徒会室で繰り広げられているものだった。ただ、いつ見ても飽きないから良い。

生徒会室にこの二人しかいないことから、ここに至るまでの状況は容易く理解できる。恐らく生徒会室に一人で待機していたハンタ―神谷のところへ、無警戒なウサギさんのごとく綾瀬さんが来てしまったのだろう。可哀相に。

ぼーっと私が見つめる先にいるのは拳が一個入るか入らないかの距離まで顔を近づけている神谷。そして顔を真っ赤にしておろおろする綾瀬さん。

つと。綾瀬さんがこちらに気付いたようだ。

「あ、と、常磐先輩！た、助けてください」

「助けてって失礼だな。まるで僕が君のことを襲っているみたいじゃないか」

「実際に襲っていると思います！」

「気のせいだよ」

「き、気のせいじゃありません！ああ、それ以上近づいちゃダメですって」

必死に暴れる綾瀬さんだが、神谷に後ろから手を回されているため脱出不可能のようだ。

……ふむ。どこかにカメラはないものか。

きよろきよろカメラを探す私に綾瀬さんは潤んだ目でこちらを見てきた。所謂「助けて！」光線。恐らく普通の男ならこの目を見てしまえばたちまち綾瀬さんに陥落してしまうだろう。いや、陥落したいと願うかもしれない。ただ、私の場合、好奇心の方が勝ってしまっている。

すまない、綾瀬さん。

ああ、そういえばまだ私の名前を言っていなかったな。私の名前は常磐京極。男らしい名前だが残念ながら私の容姿には合っていない。二年の生徒会役員だ。まあ、私のことはどうでもいいので置いておこう。

今現在、カメラ捜索中の私に絶えず視線を送ってきているのは、一年の生徒会役員、綾瀬唯。生徒会の癒しと言われる純粹無垢の女の子だ。髪はまるで綿菓子のようにふわふわで、肌は雪のごとく白い。その小柄な体格は小動物をイメージさせられる。綺麗というより可愛いに分類されるタイプだろう。クラスの中でも人気は高いらしい。容姿だけではなく、人望まで備えているのはさすが綾瀬さんと言ったところか。

そしてその綾瀬さんに暴行―いや、スキンシップをはかろうとしているのは我が生徒会会長、神谷涼。綾瀬さんとは対照的に骨の髄までドス黒く汚染された男だ。桜坂高校の覇者と呼ばれる異名を持ち、その風体は知的な印象を漂わせている。眼鏡をかけているのだが、実は伊達眼鏡。聞いてみれば、「生徒会長と言えば眼鏡だろう」と返された。そのときは激しく同意し、お互いに熱い握手を交わしたものだ。

現状を見ればわかるだろうが、神谷涼は綾瀬唯に惚れている。

四月の入学式に見かけたとき一目惚れしたとかしないとか。強引に綾瀬さんを生徒会役員にした後、このようにいつも口説いている。

ただ、実際はあまりうまくいっていないようだ。原因としては神谷が綾瀬さんで遊んでいることと、綾瀬さんが戸惑っていることと、副会長によるものと、この三つ。最後の原因についてはすぐにその理由がわかるだろう。

我が高校の生徒会は本来、一年から二年までの各クラスから一名役員が選出されるはずなのだが、神谷の独断と偏見により実際に活動しているのは七人程度。他はただの生徒会役員という看板を背負っているだけで何もしていない。何もさせてもらえないと言ったほうが正しいか。使えない人間などいらなから、と神谷は言っていたが綾瀬さんから男を遠ざけるための策略ではないかと私は睨んでいる。まあ、多分それでも近づいてくる男はいろいろな方法で抹消されているのだろうが。

「と、常磐せんぱい！助けてくださいよお」

神谷の顔を必死で抑えながら綾瀬さんが切なく声を出す。

庇護欲と言うのだろうか。それを突き動かされるような声だ。なかなかぐつとくる。仕方がないのでカメラを見つけたら助けてあげよう。

「カメラ、どこ？」

「え？カメラですか。確か遠藤先輩の机にあったと思いますけど」
そこで素直に教えてくれる綾瀬さんが素敵だ。

遠藤の机の中を漁って見れば確かにあった。インスタントカメラ。できれば本格的なカメラで撮りたいところだが、まあ今日のところはこれでいいだろう。

「・・・・ん、あった」

「ありましたか！じゃあ早く助けてくれると・・・・って何をしようとしているんですか！？」

「思い出に」

「いや、思い出にじゃなくて！」

「ありがとう。常磐。綺麗に撮ってくれよ」

「ばっちこい」

「ああ、常磐せんぱい！」

見つけても使用しないと意味がない。数枚撮ったら助けてあげよ。綾瀬さん。

生徒会室に響くシャッター音。

カメラ目線の神谷はそれでも綾瀬さんを放さない。真っ赤になる綾瀬さんはもがくがやはり意味がない。

そんなとき慌しい足音が廊下から聞こえてきた。だんだんこちらに近づいてくる。

その足音がピタッと止んだかと思うと、大きい音をたててドアが開いた。

「てめえ、涼！綾瀬に何してんだよ！」

「池西先輩！」

救世主降臨！といった感じの綾瀬さん。

ちっ、と舌打ちをする神谷。

シャッターを切る私。

そして怒鳴る副会長、池西隼人。

「ほら、綾瀬が嫌がつているだろうが！」

「君の見解で全てを決めて欲しくはないな、隼人。これは嫌よ嫌よも好きのうち、だ」

「俺の見解どころか世間一般世界一般でその行為はセクハラと呼ぶぞ！」

「失礼な。お互い合意の下ではどんな行為も正当と化すというのに」

「わ、私認めていません！」

「照れなくていいよ」

「照れてないです！」

ふう〜仕方がないなあ、とため息を吐いた後、神谷は手を放した。それにほつと息を吐き、すぐさま離れる綾瀬さん。そしてへにやへにやと言う効果音が最も合うほど地面に座り込んでしまった。よほど精神的に消耗してしまったのだらう。労う意味も込めて頭を撫でてやった。

「・・・・・・ナイスファイ」

「うっ、常磐先輩」

撫でてあげているんだからそんな恨みがかった目で見上げてこないように。

「・・・・・・常磐。お前も何でカメラなんか撮ってたんだよ。早く綾瀬を助けるよ」

「思い出って大事」

「いや、訳わからないから」

「気にするなよ、隼人。常磐はいつも訳がわからないぞ」

「お前は黙ってる諸悪の根源」

訳がわからないとはひどい。私はただこの面白い光景を一つの絵として収めたかっただけなのに。・・・・・・「いつも」の部分は聞かなかったことにしておこう。

池西隼人。生徒会副会長のポジションにいる神谷の幼馴染だ。ちなみにそう言うとき池西はへこむ。どうやら神谷の幼馴染として生まれたことが人生最大の汚点だと思っているらしい。あながち間違いでない。高い身長と切れ長の目をしたワイルドな風貌をしており、一目見た分では怖がられることが多そうだ。実際によく子供に泣かれるらしい。

そんな池西はいつも神谷の魔の手から綾瀬を救い出している。それはもう姫君を救う勇者のごとく。勇猛に果敢に。なぜ隼人がそんなに綾瀬を構うのかは説明するまでもないだろう。神谷ほど嫉妬深くはないが男が綾瀬に近づけば機嫌が悪くなるし、綾瀬に見つめられると赤くなる。見た目と反して可愛い奴なのだ。池西は。

しばらく神谷と池西が言い争っているとき、足音が二つ聞こえてきた。先ほどとは違って変わって静かな足音は生徒会室の前で止まり、再びドアが開く。

ドアの向こうにいたのは長く艶やかなストレートの髪をした女子と髪をボブカットにしている女子。高橋さんと香川さんだ。

「ああ、またやっているね。今日はどうしたの？」

「高橋先輩。聞く必要もないと思いますが」

「ま、そうだね。でもえっちゃんって淡泊」

「そういう性格ですから」

「え、絵里ちゃん、遅いよ」。教室に迎えに行っただとき用事って言うていたけど何かあったの？」

「ええ。唯を先に行かせたほうが何かと面白い——もとい楽しいかと思っただけ」

「言い直しても意味は大して変わっていないよ、絵里ちゃん！わ、私たち親友だよな？」

「親友でも裏切らないとは限らないですよ。唯」

「う、うわあああああん！」

ああ、面白い。面白すぎる。君は最高だよ、香川さん。

生徒会室に入ってきた二人の内、腰まで届くかというほどに伸びた黒髪の女子の名は高橋加奈。二年生で生徒会書記を務めていたりする。見た目は清楚な和風の美女と言った感じだが、中身はそれを全面否定するかのごとし凶暴だ。逆らう奴には鉄拳制裁。可愛いものには愛を注ぐが、醜いものには死を。そして付いたあだ名は怪獣カナゴン。それを言っただけでもすでに命はない。

そして黒髪ボブカットの女子は一年生徒会役員会計の香川絵里。

やや冷たい美貌を兼ね備えている香川さんは日本人形のような印象を与える。その見た目通りいつも冷静沈着で尚且つ、静かな物腰だ。高橋さんの性格と香川さんの性格を足して二で割るとちょうどいいかもしれない。綾瀬さんとは中学からの親友らしく、いつも綾瀬さんで楽しんでいるのだそうだ。素敵な友情だ。

言い争っていた神谷と池西も高橋さんと香川さんが来たことに気付いたらしく、ようやく言い争いを止めた。二人とも何事もなかったかのように席に座る。

「さて、そろそろ仕事を始めようか」

飄然と語る神谷にツツコム人間は誰もいない。本来は池西の役目なのだが、どうやらもうすでにHPが足りないようだ。

各々自分の定期位置に座る。

ここで席順について少し説明しておこう。まず、生徒会室に入って正面から見える位置にある座席が生徒会長、神谷涼の机である。何気に豪華だ。そして右と左の二列に席が分かれており、右は神谷に近いところから綾瀬さん、香川さん、高橋さんだ。どうして神谷の近くが綾瀬さんかは言わなくてもいいだろう。そして左は池西、私、遠藤の順番だ。

座った自分の机には書類がちゃんと置かれていた。他の人の机を見てもちやんと今日の分の書類が置かれている。どうやら先に来ていた神谷は綾瀬さんに手を出すばかりではなく、しっかりと仕事の配分もしてくれていたようだ。腐っても生徒会長らしい。

もちろん私はそれでも仕事をする気などさらさらないが。

カリカリとペンを動かす音だけが聞こえ始めた生徒会室で、綾瀬さんだけがその場から動かずまだおろおろしていた。それに気付いた高橋さんがペンを止め、眉を顰める。

「どうしたの？あやぼん」

「え、あ、あの。まだ遠藤先輩が来ていないんですけど、始めちゃってもいいんですか？」

シーンと言う効果音が聞こえるようだった。

静まり返る一同。

そして私がポツリと一言。

「・・・・・・・・・・忘れてた」

「ええ！そんなひどいこと・・・・・・・・・・」

「いやでも遠藤だし」

「ああ、遠藤だしな」

「仕方がないってあやぼん。遠藤だから」

「まあ、遠藤先輩ですしね」

「あう」

それで諦めたのか綾瀬さんも自分の席に着いた。みんなその後は特に気にするつもりもなく仕事を続ける。まあ仕方がないのだろう、

遠藤だから。

カリカリ。カリカリ。カリカリ。

生徒会室では仕事中はあまり話さない。ペンだけを走らせている。結構みんなは真面目なのだ。私以外は。

私はというと、自分の分の書類を隣の遠藤の机に少しずつ回している。多分綾瀬さん以外は全員気付いていると思うが、それに何か言う人もいない。恐らく胸中では皆「ま、いつか。遠藤だし」と思っていることだろう。恐るべし遠藤効果。

「・・・・・・・・・・疲れた」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「えっ、何か飲み物でも用意しましょうか？」

何もしていない私の第一声。何もしていないが、何もしていないのはそれだけで十分精神力を要する。しかし、それに反応してくれたのは綾瀬さんだけだった。少し悲しい。

「うん、コーヒーお願い」

「はい、わかりました」

綾瀬さんは立ち上がり、隣の給湯室へと足を運ぶ。

生徒会室のドア続きになっている給湯室には簡易キッチンがあり、淹れ立てのコーヒーや紅茶を楽しむことができる。更には冷蔵庫も完備しており、冷蔵庫には果物や調理実習で作った食べ物が入っていたりする。暇だとわざわざこの給湯室でお菓子を作ったりもするのだ。まさしくここは桃源郷。最高のくつろぎ空間。

「・・・・・・・・・・お前何もしていないんだから自分でコーヒーぐらい淹れるよ」

こちらを睨みながら池西が言ってきた。

どうでもいいが、池西君。君は顔が怖いんだからそんな表情をすると皆が泣くぞ。そして私がコーヒーを淹れない理由など言うまで

もない。

「……………面倒だから」

「あのな、その怠け癖なんとかしろ。というか面倒なことを綾瀬にやらせるな」

「綾瀬さんの独り占め反対」

「なっ、だ、誰が独り占めしてんだよ！」

「池西隼人。十六歳。獅子座のA型。趣味はバスケットと綾瀬さんの観察。特技はちら見の人」

「な、な、な」

「ほどほどにしないと綾瀬さん、気付くよ」

「べ、べ、べ、別に綾瀬なんかちら見してねえぞ！」

それは全面肯定に等しい台詞だぞ、池西。

カリカリ音だけが聞こえる室内で立ち上がって叫ぶ池西の声はよく響く。

そして何かの破砕音が向かいの席から聞こえてきた。

私と池西は二人でその破壊音の元凶、カナゴンこと高橋加奈の方へと恐る恐る目を移す。そこで高橋さんは手に持ったシャーペンを粉砕していた。注意しておくが、へし折ったのではなく、粉砕したのだ。あの細い腕で一体いかほどの握力があるというのか。

「池西。ぎゃあぎゃあうつせえぞ。こちらら集中してんだよ。次騒いだら——」

握り拳をゆつくり開いた。

パラパラッとシャーペンだったものが落ちる。

「——殺す」

ごくつと喉を鳴らす音が池西から聞こえた。しかし、不服なのか怯えながらも反論する。

「お、お、俺のせいじゃねえだろ。常磐が変なこと言うから……」

「いいんだよ。京ちゃんは可愛いから」

私にとって有利ならば偏見万歳である。

これ以上反論する勇氣はないのか命の危険を本格的に感じたのか、池西は静かに座り、仕事の続きを始めた。

ピリピリした雰囲気がようやく納まったことで、誰もがほっと息を吐く。

——その瞬間ドアが豪快に開いた。

「悪い！宿題忘れて居残りさせられちゃった！」

……
……

……さよならだ、遠藤。

私は目を瞑り、静かに遠藤に黙祷を捧げた。

「あれっ、どうしたの？みんな。元気ないじゃん！……ん？絵里ちゃん。その哀れむような目は何？」

空気が読めない男。二年の生徒会役員である遠藤達也はそのままぎゃあぎゃあと騒いだ。

神谷は十字を切り、池西は手を合わせている。

「……遠藤。ちよつとこつち来い」

眠れる獅子が今ここに目覚める。

「ど、どうしたんだよ、加奈ちゃん。も、もしかしてご機嫌斜め？」
ようやく馬鹿も今の状況を悟ったらしい。残念なことに遅すぎるが。

「いいからこつち来い」

「え、あ、い、痛い。痛い！痛いって！う、腕が折れる！」

そのまま遠藤の腕を掴んだ状態で高橋さんは給湯室の方へと歩んでいく。そのとき、ちょうどお盆を持った綾瀬さんが給湯室のドアを開けた。

「すいません。みんなの分作っていたんで遅れちゃいました」

「ああ、あやぽん、ちょうど良かった」

「えっ、どうしたんですか？・・・あ、遠藤先輩」

「ゆ、唯ちゃん！助けて！」

「え、え、え？」

「この馬鹿のことは気にしないでいいからね。すぐ終わるから私の分は机にでも置いて。この馬鹿の分は捨てていいから」

「は、はあ」

「納得しないで、唯ちゃん！騙されちゃいけない！って、ああ。閉めないで。お願いだからドアを閉めないで」

ぱたんつと無情な音がした。

そしてぐちょ、べちゃ、ごきつ、と本来なら聞こえるはずもない音が鳴り響く。

皆無言だった。言葉なんて何も意味をなさない。

私はとりあえず放心している綾瀬さんのもとへと行くとコーヒーと砂糖とミルクを受け取り、小さく「ありがとう」とお礼を言った後、自分の席へと戻った。

それで我に返った綾瀬が急におろし始める。

「え、え、何か私悪いことしました？」

「仕方がないんだよ、唯くん。全てはなるようにしかないんだから」

「か、神谷先輩」

「君が気を落とすことではないのさ。ああ、コーヒーをいただくよ。ありがとう。僕のために尽くしてくれる君の心に僕も何か報いないといけないな」

「いやこれはみんなのために………つて。せ、先輩！私今両手が塞がっているんですけど！」

「大丈夫。僕が君の手となろう」

「意味不明です！」

コーヒーの入ったカップをお盆の上に乗せているため両手が塞がれている綾瀬さんに狡猾にも神谷が後ろから抱きつく。非道とはあいつのことを言うのか。それとも給湯室の破壊者のことを言うのか。まあ、この状況を見逃すはずもなく、勇者こと池西隼人が立ち上がった。

「おい！こらっ、この極悪人！綾瀬から手を放せ！」

「池西先輩！」

「ふっ、また君が邪魔をするか。まったく、男の嫉妬ほど醜いものはないね。羨ましいなら羨ましいと言えればいいのに」

「べ、べ、べ、別に羨ましくなんてねえよ！お、俺はただ綾瀬が困っているから………」

「何を言うかと思えば。唯くんは照れているだけで困ってなどないのさ」

「困っています！ものすごく困っています！」

「………唯くん。僕のこと嫌い？」

何か色気のようなものを飛ばしながら物憂げな顔で綾瀬さんの顔を覗き込む神谷。

うつ、と詰まった後、綾瀬さんの顔が急激に赤くなる。確信犯だな、神谷。

「いや、あの、き、嫌いというわけじゃ………」

「ほら見る！お前の出番じゃないんだよ、隼人」

「ああっ！騙された！」

「いいから、お前は手を離せ！」

ここも騒がしくなってしまった。

とりあえず私は喧騒を避けるため、この状況下においても冷静に仕事を進める香川さんの隣にコーヒーを持って引越した。

「隣借りるよ、香川さん」

「どうぞ。私の席ではないですし」

そして香川さんの左隣である、今はカナゴンとなっている高橋さんの席に腰を下ろした。コーヒーを机に置き、角砂糖を六個、コーヒーに入れた後、ミルクを四つほど加える。スプーンでぐるぐるかき回していると香川さんが横目でうわっ、という顔をした。

「……………そんなに砂糖とミルクを入れるんですか？」

「私は、苦いものが嫌い」

「ならコーヒーを頼まなければいいじゃないですか」

「コーヒーは好き」

「……………それはもうコーヒーという飲み物ではない気がしますけど」

よくかき混ぜた後、そつと口にコーヒーを運んだ。砂糖のジャリつとした食感を感じると、甘ったるい味が口の中で広がる。

「うん。やはり、綾瀬さんのコーヒーはおいしい」

「……………ツツコミませんよ。私はツツコミません」

何かぶつぶつ独り言を言う香川さん。

気にする必要もないだろうと、私は残りのコーヒーを堪能する。

生徒会室の喧騒から隣の給湯室のほうに耳を澄ませば、給湯室からはもはや悲鳴は聞こえなかった。もとより聞こえていなかった気もするが。

しかし、まあ、色恋ざわめく生徒会室。虐殺場と化す給湯室。皆が皆こうだと……………。

「ふう、だな」

「どうしたんですか？いきなり」

怪訝そうに香川さんがこちらを見てくる。私だつてため息をつきなくなるさ。

「こつも皆のキャラが濃いと、平凡な私は目立たない」

「……………」

「まあいいさ。所詮、私はサブキャラだし」

「コーヒーを最後までゆっくり飲み干した後、息を吐く。感無量。

おいしいね、コーヒー。」

「・・・・・・・・常磐先輩はそういう心配をしなくても大丈夫だと思いますよ」

「ふふ、ありがとう」

「いや、本当に」

真面目な顔で頷く香川さんに私は笑顔で返しておいた。ただ、笑顔など普段使わない表情のため、口元だけしか笑えなかった気がするが。

前を見る。三角関係はまだまだ続きそうだ。その横の部屋を見る。未だに破壊音は止まない。まったく、今日も相変わらず楽しい生徒会だ。

第二話 今日も変わらぬ生徒会（後書き）

こんな感じで物語は展開していきます。

次回は視点が変わって綾瀬唯視点となりますが、基本主人公は常磐京極なので、お忘れなく。

あと、これからはこの半分くらいの長さで進むと考えてください。
・
・
・たぶん。

第三話 購買でございよ（前書き）

今回は生徒会の癒し、綾瀬唯視点です。

第三話 購買のできごと

「うう、待ってよ、絵里ちゃん」

「早くしなさい、唯。唯の大好きなイチゴメロンパンが無くなっちゃいますよ」

「それは嫌！………だけどさすがにこの人ごみを掻き分けて行くのは」

「………確かに。そうですね」

今、私は人生においてこれ以上にならないピンチを迎えています！

………いや、すいません嘘つきました。そこまで私の人生しよばくないよ。

まあ、だけどそれなりに一大事。

今日はお弁当を忘れてしまって、申し訳なく思いながらも絵里ちゃんに付き合ってもらって購買でパンでも買おうと思ったんだけど、この人ごみ。はつきり言ってもものすごい。見渡す限り人、人、人。

四月に二回ほど買いに行ったことはあったんだけど、そのとき買いに行った時間は二時間目が終わった休憩時間。思ったよりも簡単にパンが取れて、これならいつ行っても楽勝かな、なんて思ったりして………でも、今の時間は昼休み。お昼どきです。ちょっと甘く見ていたよ。

でも、どうしよう。まだ購買の場所すら見えていない。

「ど、どうしよう。絵里ちゃん！」

「………仕方ありません。最終手段です」
さ、最終手段！？

「そんなのがあるの？」

「ええ。少なくとも私はお弁当を持っています。つまり」
「つまり？」

分けてくれるの？でも、それって絵里ちゃんに申し訳ないな。絵

里ちゃんもお腹空いちやうし、遠慮しないと。

「唯を見捨てろ」

「見捨てないで！」

お昼抜きは嫌だ！

絶対授業中にお腹の音なるもん、私。

「いいじゃないですか。それなら、生徒会長か副会長に分けてもらえばいいんですから」

「えっ？で、でも、神谷先輩に分けてなんて言ったら『ようやく僕の愛に応えてくれるんだね。ありがとう。どうせならあっちの部屋で食べようよ』とか言われて密室に連れて行かれそうだし！」

「よくわかつているじゃないですか」

「池西先輩に言ったら『うん？仕方がないなあ。ま、可愛い後輩のためだしな』とか言ってくれそうな気はするけど、その後すぐ後ろから『ずるいなあ、隼人』とか言って神谷先輩が現れて大変なことになりそうだし！」

「ああ、そんな感じですね」

「だから無理！そういうわけで見捨てないでよお。絵里ちゃん」

絵里ちゃんに見捨てられたら私も今日は生きていけないよ！

「はあ、じゃあ無駄話している時間はありませんよね。イチゴメロパンは無理でも急げば焼きそばパンとかチョコデッシュとか定番物ならなんとか買えるかもしれませんよ」

「え、絵里ちゃん」

心の友と書いて心友。

ちよつと感動だよ。やっぱり神が私を見捨てても絵里ちゃんは見捨てないんだね。見捨てようとはしたけれど。

「ほら、急ぎますよ」

「うん！」

で、急いだけれど。

「う、う、う」

「ごめんねえ。もうほとんど残っていないのよ。耳ちゃんなら残っているんだけど」

そういうわけだったりする。

やっぱり物理的にあの人ごみを掻き分けようとすることなんて不可能だった。残っているのは耳ちゃんだけ。ちなみに耳ちゃんとは食パンの耳の部分だけを切り取って砂糖で揚げたもの。よく小さい頃三時のおやつで食べました。私的にも好きなんですけど、それでお昼を過ごせというのはあんまりだよ。

「本当にごめんなさいねえ。はい、耳ちゃんおまけしといたから」
「う、う、ありがとうございます・・・」

購買のおばさんの優しさが目に染みる。決して悔し涙なんかではないのだよ。

「え、絵里ちゃん。今日は天気がいいし、外で食べよっか！」

振り返って笑顔で絵里ちゃんに顔を向ける。絵里ちゃんが霞んで見えるのは、おばさんの優しさ故。耳ちゃん大好きだもんね、私！
「・・・唯」

ああ、でもなぜか絵里ちゃんの顔は霞んでいてもよくわかる。

「どうしたの？私もうお腹減っちゃったあ。早く食べようよ！」

「唯」

「ほら、競争だよ。スタート！」

猛ダッシュ！

絵里ちゃんのその哀れむような目は、心の傷に塩を塗りたくられているような気分を受けるんだよ。

お願いだからそんな目で私を見ないで、絵里ちゃん。

「あれ？あれって常磐先輩じゃないですか？」

結局、猛スピードで走った私は途中で息切れして後から歩いてきた絵里ちゃんに追いつかれ、追い抜かれてしまった。そこで待っていてくれないのが絵里ちゃんだよね。ま、まあ私も絵里ちゃんを置いていってしまったけど・・・あれは不可抗力ってことで。

その後、外に出て食べるのに良いポジションを絵里ちゃんと探している絵里ちゃんが突然ある方向を指差した。そこに目を遣ってみれば、確かにそこにいるのは常磐先輩。大きな木に寄りかかって雑草の上に座っていた。その横には大きな黒いゴミ袋。あれは何なんだろう？そしてあんなところで何をしているんだろう？……………
・っってお昼を食べている以外にないか。

「おーい。常磐せんぱーい！」

大きな声で呼びかけると気付いてくれたようで、小さく手を振ってくれた。

よかったあ。もしかしたら無視されるかと思った。

特にまだ場所も決めていなかったたので、私と絵里ちゃんはそのまま常磐先輩のもとへ。近くに寄ってみれば先輩は確かに昼食であるパンを食べていた。

……………

……………

……………って。

も、も、もしかして！と、常磐先輩が食べているのって幻のイチゴメロンパン！？先輩どうしてそれを！？

「すいません。常磐先輩。一緒に昼食を食べてもよろしいですか」

「うん、よろしいよ」

「ありがとうございます」

ペコリと綺麗にお辞儀してその場に座る絵里ちゃん。

私はちよつと放心していたりする。だ、だって常盤先輩が、あ、あのイチゴメロンパンを！

そばに来て動かない私を不審に思ったのか、先輩はその変わらな表情のまま首を傾けた。それに気付いて隣を見てみれば、ようやく絵里ちゃんがもう座っていたことを思い出す。私も慌ててそこに座り込んだ。

常盤京極先輩。実を言うと私は少し苦手だったりする。

男の人とは思えないほどの女っぽくて可愛い顔の持ち主。アイドルって言われたら絶対納得する。身長が普通の男の人と比べてちよつと低いのと、肩まである長めの髪も助長して、後ろ姿を見れば男だと思ふ人はまずいないだろう。正面から見て男だと言われても半信半疑と言ったところなんだし。

そんな常盤先輩なのだけど、幾分その表情がほとんど変わらないから、何を考えているかわからないというか。あまり口数が多い先輩でもないので話をしたこともあまりない。もう生徒会に入ってから一ヶ月以上経つのに……。でもでも、これを機に仲良くしないとね！同じ生徒会なんだし！

……。と、思う私だけど。どうしてもその視線はイチゴメロンパンに。

そしてふと、視線を落として私の手元を見れば、そこにあるのは小さな袋に詰まった耳ちゃん。所謂、パンの耳。

う、これは、あまりにも、不公平じゃないですか、神様！

「どうしたの？」

「へ？」

思いつきり見当違いに八つ当たりしていた私は、いきなり常盤先輩に話しかけられてびっくりしてしまった。

な、なんか間抜けな声が出たような……。

「さっきから見ている」

「あ、え、えつとごめんなさい！」

慌てて視線を逸らす私。明らかに不自然だ。

うつ、変な子だと思われる。

そして気になったので、ちらつと隣の絵里ちゃんの方をしてみると、

あ、呆れられている。

あの目はなんかもう、私の心なんか全部見抜いちやっていますよ、つて目だ。でもさ、仕方がないと思うんだよね、絵里ちゃん！常磐先輩と私の昼食の格差を見れば！

「と、常磐先輩はイチゴメロンパンを獲得したんですね……」

「

「うん、おいしいよ。これ」

知っています！

無表情のままパンを食べ続ける常磐先輩は実際においしいと思っているかどうかかわからないけど……まあ、本当に好きなんだろうな。常磐先輩、甘いもの好きだし。コーヒーに砂糖を五、六個入れる人だし。

「……そんなに欲しいなら、あげようか？」

「ほへ？」

ああ、なんかまた間抜けな声が！

しかも、先輩が言ったその言葉の意味を理解するのに少々時間がかかってしまった。

くれるって、イチゴメロンパンをだよな？え、でも、それって。

「い、い、いや、先輩の食べかけをいただくなんてそんな恐れ多いことは」

「食べかけじゃないやつもある」

「そ、それってどういう——」

私が言い終わる前に先輩はすぐ手元に置いてあった黒いゴミ袋を

手に取った。

実は私もちよつとその中身が気になっていたんだよね。

先輩は手に持っていたゴミ袋を逆さにしてその中身を出す。で、出てきたのは。

「……………すごいすね」

これを言つたのは絵里ちゃん。

一人黙々と自分のお弁当を食べていた絵里ちゃんだけど、そのゴミ袋の中身が出てきたときにはさしもの絵里ちゃんも驚いてしまつたらしい。いや、でも、これは驚くよね。普通。

出てきたのは色とりどりのパン、パン、パン。

チョコデッシュにクリームパンにカスタードパンにイチゴジャムパンにメロンパンにレーズンパンにアンパンにそして幻のイチゴメロンパン。

ぜ、全部甘いものだし……………。

それも一個じゃなくて一種類につき二、三個ある。こ、これを一人で全部食べるつもりだったんですか、常磐先輩。なんか想像するだけで口の中が甘くなってくるんですけど。

絵里ちゃんもちよつと口を抑えている。想像してしまつたらしい。「イチゴメロンパン、一つじゃないし。他のものもよかつたら、どうぞ」

「え、で、でも。常磐先輩のお金で買ったものをタダでいただくわけには」

「いいよ、別に。私のお金じゃない。そんなこと言う権利は、私にない」

「え？誰かがくれたんですか？」

「いや、親の金」
ぐはつ。

なんですか、それ。お小遣いも親のお金だから自分は好きにできないってやつですか。私はもう、お小遣いというものになった瞬間でそのお金は自分のものだつて思つちゃう派ですよ。

常磐先輩。偉すぎる！

で、でもそれはやっぱり。

「いや、でも、ほら、あれじゃないですか。常磐先輩の親から貰ったお金で買ったものならなおさらいただけませんよ。常磐先輩の両親が常磐先輩のためを思ってくれたお金だと思っし。常磐先輩も、両親からいただいたお金で買ったものをそんなほいほいあげちゃだめです」

いや、本当は喉から手が出るくらい欲しいんだよ！？けどやっぱりタダでは貰えないし。うう、私は耳ちゃんで我慢するもん。

常磐先輩はというと、なんだか目をちよつと大きく開けている。たぶん驚いて、呆れている顔なんだと思うけど……。うう、仲良くしようと思ったのに、変に意固地になってしまった。多分、生意気な後輩だっと思っていらっしゃるうな、常磐先輩。

ああ、絵里ちゃん。お願いだからそんな呆れた目で見ないで。

「ふふ」

突然声を出した常磐先輩の方を見ると、口元がにんまり笑っていた。だ、だけど目が笑ってない！怒っている？怒っていますよね？「ご、ご、ごめんなさい。生意気なこと言っちゃって。本当は何があっても欲しいんですけどやっぱりタダというものには抵抗があるというかなんというかタダより高いものはないってお母さんが言っていたせいかどうかわからないんですけど無償という言葉にどこか弱い自分がありまして——」

ああ、もう自分でも何を言っているかわからない。

必死でなんとか機嫌を伺おうとする私の頭に常磐先輩は手を乗せてきた。

「な、何ですか？」

何をされてしまうのですか？

しかし、先輩は口元だけ引き攣った笑み？を浮かべたまま。私の背中に何か冷たいものが流れた。怖い。怖すぎる。

絵里ちゃんの方をヘルプのサインを込めて見てみたんだけど・・・
・・・絵里ちゃん、どうしてまた君は黙々とご飯を食べているんだい？昔に交わした固い友情の絆はどこへ！？

「ふふふふ。君はいい子だね、綾瀬さん」

「はひ？」

ああ、本日三度目の間抜けな声が！

いや、でも、今はそれどころじゃなくて！と、常盤先輩。今何て言いました？

「そうだね。お金は大事」

「え、ええ。そうですね」

よくわからない状況のためこくこく頷くことしかできない私。

先輩はそんな私の頭の上を優しく撫で始めた。

べ、別に怒っているわけではないんですか？常盤先輩。

「じゃあ、タダじゃなければ、いい？」

「え、ああ、そうです。私今お金持っていますし、先輩から買わせていただけますか？」

「それじゃあ、つまらない」

「え？」

つまらないって何がですか？

「貸しー、ということで」

「貸しー？」

「いつか、返してもらおう」

そして、「ふふふふふ」と目が笑っていないまま笑いを浮かべる常盤先輩。無表情だとかを考えているかわからないと思っていたけど、それは間違いだということがわかってしまった。常盤先輩がどんな表情をしようとも私などにはその心理を読み取ることも不可能なのだ。

その常盤先輩の笑いに対して、私は「あはははは」と間抜けな笑いでしか返せなかったりする。

も、もしかしてとんでもないことしちゃったのかな！？私？

その後、笑い（？）を止めた常磐先輩は、雑草の上に転がっているパン（もちろんパッケージの中に包まれているパン）を半分ほどゴミ袋の中に戻したかと思うと、
「じゃ」

と言つて、立ち上がりそのままどこかへ去つていつてしまった。
呆然とする私。

黙々と食を進める絵里ちゃん。

「え、絵里ちゃん」

「何ですか？」

すごく切実な問題があるんだけどさ。

「あ、あのさ、もしかしてこれ全部くれたのかな」

雑草の上にはチョコデッシュが三個。カスタードパンが二個。
アンパンが一個。そしてイチゴメロンパンが五個。合計十一個の菓子パンが散らばっている。

こ、これを残りの昼休みで食べるのはちょっと不可能じゃないですか？

困惑する私に絵里ちゃんはにっこりと微笑んだ。

「お金は無駄にははいけませんよね」

「うぐっ」

「それで買ったものも無駄にするわけにはいけませんよね」

「あうっ」

「常磐先輩の好意を無駄にするわけにもいきませんしね」

「へぐっ」

え、絵里ちゃん。何だか言葉の節々に棘が見え隠れしている気がするんだけど気のせい？気のせいですか！？

そして、絵里ちゃんは同姓も見惚れるような極上の笑顔で

「頑張ってください」

と言った。

それから残りの昼休みで四個。放課後に三個。家に帰ってから四個のペースでなんとか食べきることに成功。口の中が甘甘になって

しまったのは言うまでもない。
か、カロリーが気になる。それに、もうイチゴメロンパンは結構です。

そして後日談。

どうして常磐先輩がどうしてもあんなに大量のパンを購買で買えたのかが謎だったんだけど、それは翌日、購買に行く先輩の姿を見て何かわかってしまった。

ゴミ袋と釣竿を背負って購買へと赴く常磐先輩。

せ、先輩！それってもしかしてお金払っていないんじゃないんですか！？

桜坂生徒会。

そこにいる先輩たちはみなどこか面白いというか変わっているというかおかしいというか。一番変なのは生徒会長である神谷先輩だと思っていたけど、すいません間違っていました。

一番変なのは常磐先輩です。

第三話 購買のできごと（後書き）

う、思ったより長くなってしまった。

小説は常磐京極（主人公）↓生徒会メンバー他という順に視点を変えていきたいと思います。

なるべく読みやすいように短くしたいとは思っていますが、次も長くなってしまいかも……。

第四話 デート争奪戦（前書き）

常磐京極視点となります。

第四話 デート争奪戦

「てめえ、涼！それは俺が先に取ったんだろうが！さっさと寄せ！」

「嘘を言うのはよくないな、隼人。正確に言えば0・05秒ほど私の方が早かった。手を離すのは君のほうだよ」

「あ、あの、先輩方。喧嘩はよくないと・・・」

「くそ！いつもいつも俺の邪魔ばかりしやがって。何の恨みがあんだよてめえは！」

「別に恨みなどないが、君がそう言うのはおかしくないかい。うん？何だね？どうして君がこのチケットを欲しがるのかな？誰か誘いたい人でもいるのかな？」

「ぐつ、そ、それは・・・」

「ほほお、これはまったく隅に置けないな。どう思う、唯くん。彼にはどうやらもう心に決めた人がいるらしい」

「え！？そんなんですか？池西先輩。一体誰何です？」

「ち、違うぞ！そんな人、俺にはいない！」

「照れなくてもいいですよ。大丈夫です。私、誰にも言いませんから！」

「・・・・・・・・・・」

そんなわけで今日も生徒会は絶好調だ。

私は購買で買った耳ちゃんをほうばりながら、とつくの昔に仕事を終わらせた高橋さんと、つい先ほど仕事を終わらせた香川さんと一緒にこの喜劇を見ている。ニヤニヤ笑いを浮かべている高橋さんは、基本的に仕事以外でならどんなに騒ごうとカナゴンに変身しないので安心だ。落ち着いてこの恋愛沙汰を見ていられる。

ああ、そういえば一人忘れていた。

遠藤は壊れたマリオネットのような状態で床に倒れ臥している。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・では、こうなったいきさつを説明しよう。

事件は遠藤達也、趣味はナンパで特技が振られることの男が発端だった。

遠藤が来るまでは落ち着いて——いや、我が生徒会の中では比較的落ち着いた状態で私たちは仕事をしていた。

神谷は綾瀬さんにこちらが聞くのも恥ずかしい甘い言葉で口説き。綾瀬さんはその言葉にいちいち反応して真っ赤になり。

池西はその様子に青筋を立ててシャーペンを五本無駄にし。

高橋さんは顔を真っ赤にする綾瀬さんを見て悶え。

香川さんはそのカオスの中で冷静に仕事をこなし。

そして私は携帯でテトリスをしていた。

一応、そのときにはもう皆がほとんど仕事を終わらせていたというのを、桜坂生徒会の名誉のために言っておこう。もちろん、私はしていないが。

そんな状態の生徒会室に今日も遅れて遠藤は来た。気のせいか、生徒会室までの廊下を歩く音がスキップ交じりになっていた気がするのだが、正直そんなことはどうでもいいうえ、できれば遠藤が陽気にスキップしている姿など想像したくはないので記憶の中から除外しておく。

そして、生徒会室のドアが開く。

「やあ、みんな！今日も元気い！？」

鳥肌が立つような可愛らしい声がドアを開けた遠藤から出された。神谷はしかしそんな遠藤を完膚なきまでに無視し。

綾瀬さんも神谷の精神的攻撃に耐えるのに必死なようで、結果無視する形となり。

池西は馬鹿に構っている余裕はないらしく。

高橋さんは一度ゴミを見るような目つきで遠藤を見るも、すぐに綾瀬さんへと視線を戻し。

香川さんはやはり冷静沈着に仕事をこなしていて。

私はテトリスをしていた。

ドアの前で硬直する遠藤に声をかける者は誰もいない。

いつもならそこで泣き崩れるかいじけるかする遠藤なのだが、今日は違った。なぜか怪しい笑いを口元に浮かばせて大きい声で笑ったのだ。無視することができないような大きい声で。

結構必死だった。

目じりには涙が溜まっていた。

「はははははは！おいおいおい。いいのかな？そんな態度をとっちゃってもいいのかな？今日の俺は一味違うんだぜ！」

「……あつ、遠藤先輩。こんにちは」

「うん、唯ちゃん。今日も可愛いね。そしてできれば『今気付きました』みたいな顔はしないでくれるかな？天然は無慈悲で残酷なんだよ」

遠藤の目から溜まっていた涙が一気に流れる。

それに戸惑う綾瀬さん。しかし何のことを言っているのかはわかっ
てはいないようだ。自覚がないとは恐ろしい。

「いやいや、いいさ。気にしないでいいんだよ、唯ちゃん。唯ちゃんは俺の心のオアシスなんだから。鬼や悪魔や変人が跋扈するこの生徒会で君だけが心の支えだよ」

「は、はあ。え、えっと。ありがとうございます？」

やはりよくわかっていない綾瀬さんは疑問系でお礼を言う。

そして綾瀬さんを取られてしまった神谷や池西や高橋さんは、無視していた遠藤に視線を向けた。言うまでもなく、視線は冷ややかだ。

「・・・それで、なぜ君は『殺して欲しい』とも取れるような声とテンションで挨拶をしたのかな？教えてくれるかい？遠藤」

「か、神谷。頼むからその背後のオーラを消してくれ。なぜか魔力の波動を感じる」

「いいから、答えたまえ」

くい、と眼鏡を人差し指で上げる神谷。

キラン、と眼鏡が光る。

この動作は最終警告だ。次に何か無駄で愚かなことを述べてしまった場合、そいつは存在を抹消される。嘘偽りでなく、本当のことだ。

かつて、この学校では稀少動物となつていいる不良がこれを無視し、悲惨な目を受けてしまったことがある。神谷が一体どんなことをしたかという、まずどこから手に入れたのか知れない手紙を全校放送で朗読したのだ。しかも授業中に。

それは小学生が書いたものらしく、拙いが実に優しく、愛に満ち溢れた言葉で書かれていた。

『せかいじゅうのみんながきらいになってもぼくはずっとずっとだいですきだよ』。

この文が流れたときは皆知らず知らず頬を緩め、しつとりと頬を濡らしていたに違いない。

現に内のクラスではそうだった。

そしてその中の一人は青ざめていた。

つまりはその手紙は小学生のラブレターだったのだ。

全て朗読し終えてから一つため息を漏らし、神谷は穏やかな調子でこう言った。

『本当に、実に素晴らしい。これほど愛に溢れたラブレターは僕にも書けそうにない。これを小学生のときに書いたというのだから驚きだ。ねえ、×××××××君』

死刑執行。

それからその不良のあだ名は『恋の狩人』となった。

そんな過去を持つ桜坂高校の覇者、神谷涼。

長い付き合いの遠藤がこの動作を無視するはずがなく、慌てて付け加える。

「あ、ああ、あのさ。これ。これだよ。これを手に入れたんだよ。昨日の母親からパシ——いや、親孝行で商店街に買い物に行ったときのくじ引きで当たったんだ。三等だぜ？一体これが見える？なあ、何だと思う？ははははは！知りたい？知りたい？」

ウザッ。

の一言ですむ態度の遠藤はポケットから何かのチケットを取り出した。

「なんと！最近話題の遊園地、フェアリーパークの無料チケットだ！妖精と戯れ、踊り、愛を語らおう！さあ、女子の諸君。俺と一緒にいきたい人はこのチケットを掴むのだ！」

素早く神谷と池西がダブルで遠藤を吹き飛ばし、二人同時にチケットを掴んだ。

そして現在に至るというわけだ。

神谷と池西の言い争いは未だ終わることがない。綾瀬さんが必死に止めようとしているが、おそらくなぜ争っているのかもわかっていない綾瀬さんでは、この二人を止めることなど不可能だろう。むしろ火に油を注いでいる。

「うーん。どうしょっか。いい加減この言い合いも飽きてきたよ」

あくびをしながら高橋さんは言った。

確かに、そろそろ進展が欲しいところだ。けれどただ決まるのは面白くない。周りを巻き込んで、より面白可笑しくなるような決め方でないとつまらないのだ。主に私が。

そんなことを考えつつ、香川さんに視線を送った。

香川さんはその視線に気付くと、にっこりと笑う。

「私にいい考えがありますよ」

私の視線の意図を完璧に読み取ってのこの発言。

なかなか素質がある。

「でも、まずはあの二人を止めないと。こちらの話しなんて聞かえてないですよ」

「ああ、それなら私に任せて。おい、神谷、池西」

朗らかに高橋さんは言う。

けれども言い争っている二人にはそこまで声量を伴っていないかったその声が届くはずもなく、喧騒は変わらない。

高橋さんは笑顔のままだ。

笑顔のままだ。

机を叩き折った。

静まり返る生徒会室。

「聞け」

その教室にその一言はよく響いた。

神谷は人のいい笑顔を浮かべてこちらを見る。ただ、額には冷や汗をかいている。

池西は憮然とした表情でこちらを見る。ただ、足は震えている。

綾瀬さんは怯えた表情でこちらを見る。めちやくちゃ涙目だ。

「な、何だよ。何か言ったのか？」

「ああ。つか、これから言う。じゃあ、えっちゃん。後は任せた」
目の前の残骸が目に入らないのか、満開の笑顔を香川さんに向け

て高橋さんは言った。恐らく、この生徒会室にいる人間にはもう暗黙の了解ができている。

高橋加奈には逆らうな。

それを忠実に守っているのか、香川さんは頷くと、神谷たちに視線を向ける。

「こんなのはどうですか？」

第四話 デート争奪戦（後書き）

常磐京極↓他の生徒会メンバーで視点が変わると言いましたが、やっぱり変更になりそうです。しばらくは常磐京極視点だと思います。
．．．．すいません。

第五話 赤ずきんちゃんと狼

「うう、恥ずかしいですよ、高橋先輩。本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫！もう、食べちゃいたいくらいに可愛いから！ていうか、食べちゃっていい！？ねえ、食べちゃっていい！？」

「そ、そんな猛禽類のような目で言われると冗談に聞こえないです！」

「安心なさい、唯。たぶん冗談じゃないです」

「……………え？」

「がるるるる」

「って、え、え、え？な、何で舌なめずりしているんですか、高橋先輩！？わ、わわわわ！ちよ、ちよっと、そんなとこ触ったりしたらダメですったら！」

「楽しそうですね」

「高橋先輩だけだから！え、絵里ちゃんも見ていないで助けてよ！ヘルプミー！」

「ごめんなさい。この高橋先輩はちよっと止められそうにないです」

「そんな笑顔で言われても説得力ないよ、絵里ちゃん！」

「大丈夫です。ちゃんと唯の最後の貞操は見守っておきますから」

「見守るという言葉が放置という言葉に聞こえたのは私だけ！？と
いうか、それならお願いだから見ないで！見ないでって！…………
あう、あ、あああああああ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………これは、新手の拷問だろうか？」

給湯室で着替えている綾瀬さんとその手伝い（？）の高橋さんと

香川さん。

それにドア一枚隔てている生徒会室で待機している私たち男四人
ドア越しで聞こえてくる声はリアルに私たちの想像、もとい妄想
を刺激する。さらに私から言わせてみれば、今起こっている出来事
を私の手で記録できないのはもっと辛い。さぞ良い絵が撮れただろ
うに。至極残念だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・やはり覗くのはダメだと思うかい？」

神谷が眼鏡を拭きながら冷静を装い、そう言った。

恐らく皆が考え、そして誰も口には出さなかったことを。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

皆押し黙る。

しかし、一番初めに池西は口を開けた。

「・・・・・・・・ダメだろ」

さすが勇者池西だ。ここでその言葉を出せるとは。ただ、鼻血を
出していなかったらもっと格好よかっただろうに。

「ダメ」

とりあえず、私も付け加えておく。さっきデジカメを香川さんが
持っていくのを見ていたから、後で見せてもらおう。しかし、この
展開を予想していた香川さんには本当に脱帽だ。

そして男三人の視線が沈黙が続けている遠藤に集まった。

その遠藤は、まるで真理に辿り着こうとしている求道者のような
表情だった。遠藤のくせに。

そして目を瞑っていた遠藤の目が見開いた。

遠藤の目は血走っていた。私としたことが二、三步退いてしまう。
それぐらい遠藤はキモかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ど、どうした？」

目を見開いたまま押し黙る遠藤に池西が恐る恐るといった様子で

聞いた。さすがの池西も今の遠藤には引いているらしい。でも、池西。鼻血は拭いておいたほうがいいと思う。

十五禁になりそうな顔をしながら押し黙る遠藤はついにその口を開いた。

「……………いや、透視できないかなあって思ってた」

神谷は全てを打ち砕くようなハイキックで遠藤の顔面を蹴る。池西は全てを粉碎するような左フックで遠藤のわき腹を殴る。

私は全ての男が沈黙を余儀なくされる場所へとソフトボールの球を投げる。

ズシュ、遠藤は300のダメージ。

ドゴツ、遠藤は300のダメージ。

グシャ。

痛恨の一撃。

遠藤に1000のダメージ。

遠藤は力尽きた。

「……………常盤、それは酷くないかい？」

「……………俺も。少し遠藤に同情した。というより、どこにソフトボールなんてあった？」

どこか痛ましげな顔をする神谷と池西がこちらを見てそんなことを言い出した。

何を言うかと思えば。君たちだって攻撃していたじゃないか。それに。

「遠藤だったら、本当に透視しそだった」
哀れな目で遠藤を見る神谷と池西もそれには深く頷いていた。

高橋さんが神谷と池西の喧騒を止めるために尊い犠牲（生徒会室の遠藤の机）を払って場を静めた後、香川さんは神谷と池西の両者を治めつつ、周りを巻き込むという最高の提案をしてくれた。それはおそらく、私などでは到底見つけ出すことのできないものだっただろう。さすが香川さん。そしてまさしく私が望んでいた展開だ。その提案を簡潔に言ってみよう。

デート争奪戦。

・・・簡潔すぎた。もう少し詳しく言えばこんな感じになる。

一、まず、綾瀬さんが仮装して校内を逃げ回る。チケットはもちろん装備。

二、その護衛に高橋さんと香川さん。綾瀬さんに近づく人間は皆殺し・・・らしい。

三、私たち男四人衆はその護衛付きで逃げる綾瀬さんを捕獲。

四、見事護衛を倒し、チケットを持つ綾瀬さんを捕獲した男が綾瀬さんとデートに行ける。

さて、ここで面白い事実気付いた人はいらるだろうか？

・・・そう、綾瀬さんが仮装をする理由は何一つ見当たらない。ぶっちゃければ、仮装をする必要性など皆無なのだ。

しかし、そこで神谷の口八丁が活躍。

まず綾瀬さんが仮装をすることの重要性和それによる生徒会の意義を長々と論じ、それによって生じる生徒会の利益と自分の欲望を熱く語ることによって、まるでそれが正論であるかのように信じ込ませていた。

ふと、神谷が今まで騙してきた人たちの顔が浮かびそうになったが、意識して封印しておいた。

最後に何かを刷り込まれた綾瀬さんがひたすら頷いていたのが、
臉の裏に鮮明に残っている。それを見て目頭が熱くなってしまった
のは言うまでもないだろう。

綾瀬さん。君は何て単純なんだ。

足元にへばりついてピクリとも動かない遠藤を無視し、あの綾瀬
さんの姿を回想していると目の前の給湯室のドアが叩かれた。どう
やら着替え終わり、襲われ終わったらしい。

ゆっくりと、ドアが開く――

――と同時にすさまじい勢いで閉められた。

「無理！無理だって！絶対変だもん！」

「何を今更。ほら、腹をくくりなさい」

「大丈夫よ！もう、可愛すぎて襲っちゃったくらいなんだから！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・さて、行きますよ、唯」

「・・・・・・・・うん。ごめんね、絵里ちゃん」

「あれ？どうしたの？何か急に素直になっちゃって」

ガラガラとドアが開く。

何か悲愴な音に聞こえたのは私だけだろうか？

出てきたのは香川さんと、赤い頭巾を目深く被りフワフワした可
愛らしい服を着た女の子だった。

まあ、演劇部の衣装を借りたと言っていたから妥当といったところ
か。

目の前の、俯きながら顔を赤くする赤ずきんの綾瀬さんを見てそ
んなことを考える。

そして両隣の異様な雰囲気気付き、綾瀬さんからその二人に視
線を向けた。

神谷は震えている。

池西は再び鼻血を垂らしている。

「……………重傷だ。」

「そうか、ようやくわかったよ。すまない、唯くん。君の気持ちに
気付いてあげられなかった過去の自分が僕は憎い」

「な、何ですか？」

拳を握り締める神谷に怪訝そうに綾瀬さんは顔を上げた。

「……………」

「……………」

「……………」

予想外だ。

顔を上げた綾瀬さんの顔を見てそんな言葉が浮かぶ。さしもの神
谷も開けた口が塞がらないといった様子だ。池西もその鼻血の量を
蛇口全開並にパワーアップさせる。

「いやいや、まさか化粧をしてくるとは。」

普段化粧らしい化粧をしていない綾瀬はそれでも可愛かったのだ
が、化粧をした綾瀬さんはもはや人ではなかった。

いつもよりも赤く瑞々しい唇。ほのかに赤く染められた頬。カー
ルされた長い睫。

ああ、これは危ないな、と私が思ったのと同時だった。

神谷が綾瀬さんに襲い掛かった。

「きゃああああああああ！な、な、な、何するんですか！いき
なり！」

「……………あ、ああ。すまない。あまりのことに脳
がおかしくなってしまったようだ。だけど、これには君にも責任が
あると思わないかい？これはもう、僕の愛を受け取る準備は万端な
のだと、そう言いたいのかと思ったよ」

「全然、一言も、言っていないです！何でそうなるんですか！？」

「赤ずきんの話を知らないのかな？赤ずきんは一体何に食べられたと思う？」

「……………」

「そういうことだよ」

「た、た、た、助けて！」

押し倒されている綾瀬さんはかなり切羽詰まった声で助けを求め
る。

そして私と目が合った。

放たれる無意識下でのウルウルビーム。しかも今の綾瀬さんの顔
ではその効力は数十万倍までに跳ね上がる。

ああ、これは堪えられない。

私は無言で香川さんに手を伸ばした。

香川さんは無言で私の手にデジカメを置く。

そして私はアイテムを装備。

使用。

使用中。

「うえええええええん。い、い、池西先輩！」

最後の頼みの綱とばかりに池西の方へと綾瀬さんは視線を向けた。
しかし、そこには池西などいない。

そこには出血多量で倒れる『男』が一人いるだけだった。幸せそ
うな寝顔だ。悔いはないだろう。

「池西先輩！？い、一体何があったんですか！？」

「聞いてあげるな、唯くん。彼は自分の心に殉死したのさ。あれが
男の生き様だよ。目を離さないでやって欲しい」

「は、はあ。……って、ど、ど、どうして先輩は離れないんで
すか！？そして私が顔を背けている間に手をどこにやっているん
ですか！？」

「気にしないで」

「気にします！」

言い争いを続ける綾瀬さんと神谷。

股間を押さえて倒れる遠藤に、満足そうな顔の池西。

綾瀬さんをうつとりと眺める高橋さん。

傍観を続ける香川さんとデジカメを回す私。

さて、そろそろか。

「・・・香川さん」

「はい？何ですか、常磐先輩」

こちらに顔を向ける香川さん。

そんな香川さんに私は笑顔を向ける。もちろん、口だけの笑いになっ
てしまっていると思うが。

「ふふふふ。少し、用事がある。後はよろしく」

「いいんですか？神谷先輩が満足したらもうゲームは始まりますよ。
常磐先輩も参加するはずではなかったでしょうか」

「面白いことをより面白くする。これは大切。サブキャラにはサブ
キャラの役割があるのさ」

「・・・悪巧みですか？」

「そうとも言っ」

そして手元にあるデジカメを香川さんに渡して、もう一度口元だ
け笑った。

そんな私に香川さんはにっこりと笑う。

「頑張ってくださいね」

「そうするよ。ゲームはいつでも始めていい。じゃ」

私はいつも通りの生徒会室を出ると、廊下を歩いて、ある一室を
目指した。

ふふふふ。さて、楽しませてもらおうか。

第五話 赤ずきんちゃんと狼（後書き）

今回の話は長くなりそうです。

綾瀬さんのデートは一体誰の手に渡るのでしょうか。作者もわかりません。

『な、何だ今の銃声は？……戸口？どうした。応答しろ。戸口……！』

「ふふふふ。なかなか、面白かった」

「き、貴様！常磐京極！」

「これからゲームが始まる。ちよつと、放送室。借りるよ」

「くつ、い、一体何を始めるつもりだ！クーデターでも起こすつもりか！」

「いや、綾瀬さんのデート争奪戦の予告」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

[illegible]

「今なんと？」

「綾瀬さんのデート争奪戦の予告」

□ • • • • • □

「どうした？」

『……聞いたか野郎ども！おお、何だ、そんなことならど
 んどん使ってくれ。うん、遠慮はいらない。私、放送委員会会長の
 名において全てを許そう。ああ、それと私はこれから用事があるの
 で勝手に使ってくれ。さらばだ！……早く、唯ちゃん
 を探せ！』

ポチツとな。

私はそのトランシバー……ではなくて携帯の電源を切った。そして私の前に倒れる女子に視線を向けてみる。今は私のペイント弾をくらい、顔が爬虫類の警戒色と同じ色をしているのだが。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・うつ、委員長のバカ」

黄色に染まった顔から一筋の涙が流れる。

・・・・・・・・哀れだな。

あまりに哀れすぎるので、このまま放置するのも気が引ける。確かに相手が綾瀬さんでは分が悪いとは思うが、十分この子も美人と言える顔立ちなのだ。まあ今は少々、ドキツイ色をしているが、洗えば取れるので何の問題もない。

とりあえずポケットからハンカチを取り出し、その子に投げ出しておいた。

「・・・・・・・・何の真似？敵の施しなんていらないわよ」

「今日の味方は明日の敵。今日の敵は明日の味方」

「っ！」

「言葉なんて、いらない」

「う、う、う」

「じゃ」

そして私は走り出した。

決して振り返ることなく、走り出した。

ペイントが涙で取れかけ、すさまじい顔をしていた女子の顔を見ないため走り出した。

正直、怖かった。

ピンポンパンポーン。

「・・・・・・・・こちら、二年生徒会委員の常磐京極。連絡するので、聞く。今現在、一年生徒会委員の綾瀬さんが赤ずきんの格好をして逃走中。綾瀬さん捕まえた人は綾瀬さんと一日デートが実現。夢の国へのご招待。男子諸君、または特殊な趣味の女子諸君。ぜひ、

頑張るがいい。ふふふふふふふふ』

ピンポンパンポーン。

放送終了。

一瞬の沈黙。

と、同時に学校が揺れた。

すさまじい熱気だ。放送室まで声が届くとなると、全校の生徒及び教師が声を出しているとした考えられない。いやはや、作戦大成功。綾瀬さんの学校での人気が嫌でもわかるというものだ。さすが生徒会の癒し。

しかし・・・疲れたな。放送委員を軒並み倒すのも、あんなに長く話したのも久しぶりだ。

できれば綾瀬さんが淹れてくれたコーヒーでも飲んでゆっくりしたいところだが、綾瀬さんは今大変なことになっているだろうし、私にもそんな暇はないので仕方がない。早く綾瀬さんを探し出してその様子を映像に収めねばならないのだ。

やれやれ、サブキャラも裏方で大変なのだな。

そんなことを囃み締める瞬間だった。まあ、悠長にしている時間は本当にない。確かに護衛として高橋さんと香川さんがいるが、さすがの二人も桜坂高校の男子全員と女子少々には勝てないだろう。それに、もし遠藤などが綾瀬さんを捕まえてしまったら一大事だ。主に、遠藤の身が。

そう思い、放送室を出ようと後ろ振り返った。

しかし、そこで私の動きは止まる。

・・・・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・・しまった。

そんな言葉はもう遅かった。振り返った視線の先には――悪魔の姿があつたのだ。

・・・・・・・・・・神谷涼。

「やってくれたね、常磐。君が何かを仕掛けてくるとは思つたが、まさかこう出るとは。どうしてくれるんだい？綾瀬さんを探すのがより困難になったよ。いや、それどころかもしかして他の連中が唯くんを捕まえるなんて事態になるかもしれない」

・・・・・・・・・・」

「答えたまえ」

神谷が眼鏡を上げる。最終警告が発令されてしまった。ため息をつく。

このピンチを回避するには一つの方法しかないだろう。

「・・・・・・・・・・すまない、神谷」

「謝って済むとでも？」

「いや、そのことじゃない」

「・・・・・・・・・・じゃあ、何のことだ？」

「このことだ」

袖口から取り出す閃光弾。

それを手にかけると同時に思いっきり床に叩きつける。放送室に強烈な光があふれ出した。

「くっ、常磐！」

「私は、油断していた。でもお前もだ、神谷。相変わらず詰めが甘い。ふふふふふ。では、さらばだ」

私は走り出した。

決して振り返ることなく、走り出した。

そして壁に激突した。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

光が収まり、放送室は元の明るさへと戻っていく。

目元を押さえる神谷。

額を押さえる私。

そして、目が合う。

「常磐、閃光弾を使うならお前はサングラスなどを装着すべきではなかったのかな？」

「・・・・・・・・」

「相変わらず、詰めが甘い」

「・・・・・・・・」

「それで、一体どうするつもりなのか、教えてくれるかい？常磐？」

「・・・・・・・・」

私はゆっくりと両手を挙げた。

第六話 捕虜？（後書き）

ちよつと短くなつてしまいました。話しの長さを調節するというのは難しいんですね・・・。

このデート争奪戦はまだまだ続きます。飽きないような話を書いていきたいと思いますので、よろしく願います！

第七話 わんわん（前書き）

途中視点が変わります。 印が目印ですので、ご注意ください。

第七話 わんわん

煙が徐々に引いていく。

霞んだ視界もそれに連れて鮮明となつていった。

そして視界に映つたのは死屍累々の数々。

夢を追いかけて、夢と共に散つていった男達の屍がそこにはあった。まったく。この程度の男たちが唯くと付き合えると思つてのこと事態、腹立たしい。身の程というものをわきまえて欲しいものだ」

そしてその屍の上に立つ男、神谷涼はその美麗な顔に歪んだ笑みを乗せて笑つていた。手には血に濡れた木刀を持ち、その木刀からは軋々と血が垂れ床へと広がっている。相変わらず恐ろしい。さすが生徒会ナンバー001。『悪魔』の名を持つ男だ。

「さて、こんなところで足止めされてしまつてはかなわない。先を急ぐよ、常磐。早く唯くんを見つけ出さなくては。きっと彼女も僕のことを今か今かと待っていることだろう」

十中八九、そんなことはありえない。

そう言いたくとも今の私にはそんな権利などない。

仕方がないので、捕虜らしくすることにした。

「わん」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・すまない、常磐。その顔とその格好でそんなことは言わないで欲しい」

「なら、この首輪を外して」

「それはダメだよ。ちゃんと捕虜の証はつけないと」

私の首には神谷の捕虜の証である首輪が装着されてしまっている。

犬がつける首輪だ。なんだかエロティックだ。ちゃんとリードまで付いているのが神谷らしい。

・・・そう、今の私は神谷の飼い犬と化しているのだ。捕虜の運命とはいっても過酷なものとはいえ、これを着けられたときの屈辱は聞きしに勝るものがある。まあ、これはこれで面白いから別にいいのだが。

「それで、次はどこに行く？」

神谷を見て尋ねる。神谷は「ふむ」と言い、顎に手をかけて考える仕草をした。もちろん、夢に散った男の体はしっかりと踏みつけている。なんだか一瞬「ぐえっ」という音が聞こえた気がしたが、気にしないでおこう。

「そうだね。しらみ潰しに探していこうかと思っていたんだけど、こつも人にうろつろつとされては面倒だ。それにいちいち戦闘になっ
ていては隼人に先を越されてしまうかもしれない。ここは絵里くんの
思考を読んで、先回りすべきだろう」

「なぜ、香川さん？」

「全校生徒が敵と化している状態で、唯くんはたぶんおろおろする
だけだ。そこがまた可愛いんだけど。加奈くんは暴れるだけ。そう
なると必然的にブレーンは絵里くんとなる。それが一番合っている
役割だろうしね。そして恐らく、今唯くんたちは逃げていない」

「・・・隠れている？」

「その通り。そして隠れている場所もだいたい見当はついている。
ただ、そうだとすると少し厄介だが。・・・まあ、そこは常磐。
君の出番となるだろう。くれぐれも唯くんを捕まえることのないよ
うにして、唯くんを引きずりだしてくれ」

ずいぶんと無茶を言う。だが、捕虜には拒否権などない。

仕方がないので、捕虜らしくすることにした。

「わん」

「・・・さて、行こうか、常磐」

そそくさと神谷は床に倒れ臥す男達を踏みつけながら先を歩いて

いつてしまった。

まったく、冗談の通じない奴だ。

すさまじい喧騒が外から聞こえてくる。だが、その音もこの部屋を通り過ぎていき、遠くなっていっただ。どうやらここに逃げ込んだのは間違いではなかったらしい。

「しかし、まあ。やってくれましたね。常磐先輩」

まさか校内放送をしてくるとは思わなかった。

常磐先輩の思考が読めないのはわかっていたが、放送室を占領してしまうなんて。おかげでこちらは重要な戦力を失ってしまうは、こんなところに隠れないといけないはで散々だ。……まあ、私も面白そうだと思ってエールを送ってしまったから文句は言えないのだけだ。

「大丈夫かな、高橋先輩……」

「大丈夫でしょう。あの高橋先輩ですから。すぐにこちらとも合流できるはずですよ」

赤ずきんの格好をしているわりに、なぜか小動物に見えてしまう唯に視線を向けると、唯はなんだか落ち着かない様子だった。まさしく狼と呼んで遜色のない男たちに追い掛け回されたのだから当然かもしれないが。

……その群れに女子が混ざっていたのは唯に言わないほうがいいだろう。

虫が湧くようにして出てきた男、男、男、そして女から逃げるた

め、私たちは廊下を全速力で走っていた。廊下を走ってはいけいないなどという規則はすでに神谷先輩が握りつぶしているので何の問題もない。しかし、走っている途中で高橋先輩は急に立ち止まると、私たちに背を向けて、一人、大群に顔を向けた。

「ここは私にまかせて！あやぱんとえりっちは今のうち逃げときなさい」

「・・・わかりました」

「そ、そんな、絵里ちゃん！高橋先輩はどうなるの！？」

「私のことはいいの。私は可愛いものを守るために生まれてきたのだから」

「せ、先輩」

「二人で、幸せになつてね」

「・・・いや、あの何かがおかしい気がする」

その顔が笑っていたのを思い出す。とても晴れ晴れとした笑顔だった。

そして大群に顔を向けたときの顔を思い出す。阿修羅、と喉まで出掛かった。

大群を高橋先輩にまかせて走り出した私たちの後ろから聞こえてくる、悲鳴と断末魔。

とてもではないが後ろを振り返ることなどできなかった。

あのときの情景を思い出し、私としたことが身震いしてしまう。

そして横を見れば唯も震えていた。どうやら唯も同じことを考えてしまっていたらしい。

唯を落ち着かせるのも私の役目なんでしょうね。たぶん

「ここまでくれば恐らく大丈夫ですよ。そんなに怯えなくても」

「本当？絵里ちゃん」

怯えの中でも目を輝かせる唯。それに私は笑顔を向ける。

「恐らく、です。確証はありません。神谷先輩は何を仕掛けてくるかわからず、常磐先輩は何を考えているかわからず、遠藤先輩は何

をしてくるかわかりません。まあ、池西先輩ならここには来ませんね」

事実をしつかりと嘘偽りなく伝える私。

がくつ、と唯はうなだれた。

唯を落胆させるのも私の役目なんですよ。たぶん。

「うう。……でも、それなら池西先輩に捕まったほうが楽じゃないかな？池西先輩は別に私とデートなんてしたくないだろうし」

「……本気ですか？または正気ですか？」

「え、えつと何？本気だけど、あと正気だよ」

……可哀相な池西先輩。

まあ、私の知ったことはありませんが。

「とにかく。ここにしばらく隠れていましょう。何の解決にもなりません、しばらくこの騒動が治まるまでここにいないとすぐに見つかってしまいます。あなただって、見ず知らずの人とはデートなどしたくないでしょう」

「う、うん。……でも、どうしてこんなに人が追いかけてくるのかな？やっぱり神谷先輩や常磐先輩が何か裏でしていると思う？私を捕まえたら賞金が出るとか。あの人たちは私のことをおもちゃにして楽しんでいるんだよ、絶対」

「……」

「うええええええええええ。黙らないでよ！そこは否定しようよ！ちよつとだけ『そんなことはありませんよ、唯』って言葉を期待しちゃったよ！」

「……いえ、もう何からツツコメばいいのか」

本当にもう、この天然は。

何か、文句とか忠告とか説教とかいろいろと織り交ぜたものをおうと口を開く。

——その口を開く前に目の前のドアが開かれた。

それに慌てて視線を向ける私と唯。けれどそこに入ってきたのは女子のようで、とりあえず安心。とはいえ、女子の中にも特殊な趣味の持ち主はいるので完全に安心はできない。

警戒した目でその女子を見てみると、何か、違和感を覚えた。

何かが、おかしいような。どこかで見たことがあるような、そんな違和感。

もちろん、目の前の人物など見たことがない。

肩まで伸びた綺麗な黒髪に、少したれ目の可愛い目。スカートから伸びる白い長い足。モデルかアイドルかと思わせるほど可愛い子だ。けれど、おかしい。こんなに可愛い子なら一目を引くはずだし、目に留まらないはずがない。・・・というより、その首にかかっているのは何だろう？首輪か？

いぶかしむ私。唯は相手が女子ということでもう安心しきっている。

よく見なさい、唯。首輪をつけて、そこにリードまでついているのが普通の人間なわけがないでしょう。

目の前の人物はドアの近くに立ったまま動かなかった。そしてその女の子は無表情のまま、

「わん」

と言った。

頭の上にハテナマークを重ねる私たち。

けれどそれを問いただす暇などなく、またしてもドアが開いた。

「ごくろう。やっぱりここにいたか、唯くん」

そして現れた生徒会長、神谷先輩。

「か、か、神谷先輩！？」

狼狽しまくる唯。当たり前だ。神谷先輩はここをどこだと思っているのか。

「し、信じられないです！ここ、女子トイレ室ですよ！」

唯が本当に信じられない目つきで神谷先輩を見る。しかし、神谷先輩はそれに飄々とした笑顔で答えた。

「大丈夫さ。事前に確認しておいた」

私は無表情で佇むその女子に視線をやる。

「……その女の子ですか。しかし、他人を巻き込むとは神谷先輩らしくないですね。しかも、唯以外の女の子を手にかけるなんて」
「……なんだ。絵里くんも気付いていなかったのか」

「何のことです？」

「……ふう、悪ふざけがすぎるんじゃないか、常磐。僕まで誤解されてしまったじゃないか」

……

……

……

「……えっと、何て言いました？この先輩は。」

私と唯は呆然とその女の子を眺めた。つま先へと視線を下ろし、顔へと視線を持ち上げる。そこにいるのはどっからどう見ても完璧な女の子。服もしっかりと女子用の制服を着ている。

そして、その女の子は不意に笑った。目は笑っていない。口元だけの笑みを。

「ふふふふ。予想通りの反応。楽しかったよ」

「……」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・マジですか？」

「マジ」

目の前の女の子、常磐先輩は頷いた。

その言葉にフリーズしていた唯が我に返る。

「え、ええええええええええ！な、な、な、何でそんな格好をしているんですか！？常磐先輩！？いえ、あの、その、似合っているから全然OKですけど！」

「誤解しないように。別に趣味じゃないよ。神谷のせい」

「それだと僕の趣味みたいじゃないか。誤解を与えるような発言をするな」

神谷先輩が常磐先輩を小突く。その格好の先輩たちだとバカッブルに見えないこともないから恐ろしい。

「何、簡単なことだよ。こんな状態では男子が入ることができない場所へと隠れるのが普通だからね。そこを上階から順に調べていっただけさ。こちらには常磐という武器もあつたから難なく調べられた。服も簡単に調達できたしね」

「捕虜とされてしまった不幸」

よよよ、と泣き真似をする常磐先輩。けれど、その顔は相変わらずの無表情なのでなんとも言いつらい。

「さて、それでは唯くん。もう少しロマンチックな場所にいたかったが、仕方がないだろう。ここでゆつくりとすますとしようか」

「な、な、な、何をですか！？」

「何って、唯くんの捕獲だろ？」

「・・・・・・・・」

「何を想像していたんだい？」

清らしい笑顔を浮かべる神谷先輩に唯は顔を真っ赤に染め上げていった。

ま、どうせ唯のことだからキスとかその辺りが限界でしょうけど。そして迫っていく神谷先輩に後ずさりする唯。けれど残念ながら、

この狭い空間では後ろに退くのも二、三步といったところ。案の定、すぐに唯は後ろに詰まってしまった。

「あ、あの。せ、先輩。無理はいけないと思うのですが」

「別に無理にしているわけではないだろう。君だってこのゲームには同意したじゃないか」

「そ、そうですけど！それは何というか、詐欺にあつたというか、そんな感じなんです！」

「大丈夫。優しくするよ」

「だから何をですか！？」

ああ、これは本当に唯の貞操の危機かも。

そう思いつつも、立ち位置は常磐先輩の横へと移動して傍観モードとなっていた。私も神谷先輩に逆らう気はない。なにより、この面白い情景を見逃す手はない。

「え、え、絵里ちゃん！いつものことだけど、何で君は助けてくれないの！？」

「楽しいから、ですかね」

「うえええええええええん。ひどいよお。ひどいよお」

泣きじゃくる唯。本当に泣いているからやっかいだ。

仕方がない。後でお菓子でも買って機嫌でもとっておきますか。

そんなことを考える私は常磐先輩が何か呟くのを聞いた。しかし、あまりに小さな声だったので何と言ったかよく聞こえない。何と言ったのかを尋ねようとすると、

——ドアが突然ものすごい音を出して開いた。

誰が入ってきたかもわからず、その人は私と常磐先輩の間を風のごとくすり抜けると、神谷先輩へと飛び蹴りをかます。神谷先輩も途中で気付いたのか、なんとかそれをガードした。

「涼！お前、綾瀬を泣かして何してやがった！」

そして女子トイレに響く池西先輩の声。ドアは跡形もなく壊れて

しまっている。

「…………どうでもいいけど、ここが女子トイレだということを忘れてはいないでしょうか、この先輩たちは。」

「……やれやれ。本当に君はいいところで邪魔をするな、隼人」

「お前のいいところっていうのは大概が止めるべきことなんだよ！」

「まったく、君のせいで唯くんとなかなか進展できないじゃないか。こうして唯くんも僕の熱い抱擁を待っていたというのに」

「私、待っていませんよ!？」

「そんなもんさせてたまるか！」

そして言い争う先輩たちと唯。

やっぱり、今日もいつもの展開ですか。

私と常磐先輩はその光景をただぼんやりと見ていた。

本当に進展なんてありはしない、腹黒い先輩とお子様な先輩とボケボケの唯。こうしてこちらが手助けしても変わらないなんて、まったく、この人たちは。

「それで、いいと思う」

まるでこちらの思考を読んだような常磐先輩の一言にドキリとして視線を向けた。常磐先輩は男の子とは思えないような顔と格好で口元だけ笑っている。

「……読心術まで使えるなんて設定はいらないですよ、先輩。」

「しばらくはこのままでいい。居心地がいいこの関係が壊れてしまふのは、嫌だ」

「……そうですね」

「ふふふふ。ま、今日は楽しめた。それじゃあ、私は退散するでしょうかな」

「お邪魔虫にはなりたくないですね。私も退散しますよ。一緒に行きましょうか、先輩」

そして私と常磐先輩は女子トイレ室を出て行った。中ではまだ言い争いが続いている。

本当に、いつまでも変わらない。

「一つ、聞いてもいいですか？」
「何？」

男たちが倒れ臥し、静かになった廊下を歩く私と香川さん。黙ったまま歩いていると、香川さんが私に尋ねてきた。

「池西先輩を呼んだの、常磐先輩ですか？」
「なんで、そう思う」

「いえ、勘ですけど。なんとなく、そう思っただけです」

「・・・その通りだよ」
「そうですか」

そして私たちはまた黙って歩き出した。
残してきた神谷と池西と綾瀬さんはどうなっているのか、見なくてもだいたいの想像はつく。きっとまだいつも通りの言い争いを続けているのだろう。最後にチケットがどうなるのかはわからないが、できれば丸く収まるようにして欲しい。

いつまでも変わらないで欲しいから。

私と香川さんは男たちが倒れ臥す廊下を歩く。

やや、騒がしくなってきた廊下を歩き続けた。

何かを忘れていたような気がして首を傾げるも、たいしたことではないだろうと思い、すぐさまそれを頭から振り払う。

そして私たちは廊下の角を曲がった。

「ごべ、ごべんなばい。調子にのって、ごめんなばい」

「え・ん・ど・う。なーんでお前ごときが私に齒向かおうとしているのかな？　しかも他の男子の影に隠れて」

「いや、違ふんです。これは不可抗力とか、そういうものでして」

「喰らえ！長年の恨みだ、このカナゴンが！」

•

「そう、言ったよな。なあ、遠藤」

「はははははは」

「ははははははは」

「ごめんな——くはっ！」

「さようなら、遠藤。お前といた日々はもう覚えていないや」

「ええ！今、現在進行形でやっていることを毎日されていたのに！」

「うう、ああ。ごめ、ごめんなさい！もう、本当にごべ、ごべんな？って、ああ。」

「はい。もう、しばべんから！」

「ひとつ。ふたつ。みつ。よっつ。いっつ……」

「ひいひいひいひいひい
じいじいじいじいじい

くるり、と私は向きを変える。

香川さんも私と同じく、今来た道の方へと体を向けた。

「香川さん」

「何でしょうか？」

「突然、喉が渴いた。お茶を飲もう」

「奇遇ですね。私もなぜか急に喉が渴いてきました。きっと生徒会

室に緑茶があつたはず。飲みにいきましょうか」

「そうだね」

そして私たちは生徒会室へと足を運ぶ。

決して後ろから悲鳴とか悲鳴とか悲鳴とか断末魔とか、そんな類のものは聞こえてこない。

ああ、今日も楽しい一日だった。

第七話 わんわん（後書き）

ふう、なんとか収まった・・・かな？

途中しんみりするような場面があつたかもしれませんが、基本コメデイです。

ちなみにこれでデート争奪戦編は終わりです。これからは一話完結型に戻すと思いますので、これからも読んでいってください。お願いします！

第八話 人の噂は何日まで？

あのデート争奪戦から一週間後。

この間の喧騒が嘘のようにこの学校の生徒及び教師たちは、静かで穏やかな学校生活を楽しんでいる。飢えたハイエナのごとく綾瀬さんにたかっていた我が高校の男達も「僕たちがそんなことをするはずがないだろう。マドモアゼル」とでも言うような紳士面でさわやかに笑っているのだから面白い。まあ、学校に設置された隠しカメラがあのですさまじい紳士たちの行動を撮っているし、しかもそれは近々公開予定なのでそんな顔をしていられるのも時間の問題だろう。目を見開き、涎を垂らし、鼻で獲物を追う紳士たちの映像が全校に流されるかと思うと今から楽しみで——いや、可哀相で仕方がない。

ちなみにあのデート争奪戦の結果なのだが、結局、デートは神谷と池西と綾瀬さんの三人で行ったそうだ。

どうもあのチケットは『家族で行こう。フェアリーパーク』という名目のくじ引きであつたらしく、無料となるのは四人までだったのだ。しかし、あの三人の中に割り込もうとするお邪魔虫など遠藤以外にはいなかったため、神谷と池西と綾瀬さんの三人で仲良く遊びに行っていた。神谷も池西も不満そうだったが、綾瀬さんの嬉しそうな表情を見て諦めたらしい。実に喜ばしいできごとだ。しかも、帰ってきた後でデートの内容を聞いたときの綾瀬さんの表情も、とても興味深いものがあった。顔を真っ赤に染まらせた原因は一体何だったのだろうか？それなりに検討は付くが、今度神谷あたりから聞き出してみるか。

・・・あと、そのデートの裏には血だらけで天井に吊るされた一人の男の犠牲があつたことを、一応、明記しておこう。

逆さに流れる血の涙の中、「あれって、俺が当てたやつじやなかったけ？」と言っていたのが未だに耳に残っている。まあ、そういうこともあるだろう。そして恐らくこれからも絶えず起こり続けることだろう。頑張れ、遠藤。負けるな、遠藤。死ぬな、遠藤。

さて、そんなこんなでデート争奪戦も一段落し、特にこれから予定も珍事もなく、また起きそうにもないので、久しぶりに生徒会も平凡な日々を送るのではないか思っていた今日この頃。

しかし、その予想は見事に打ち砕かれた。

いやいや、私的には面白いのならそれでいいのだがね。

今日も私は生徒会室への廊下を歩く。

廊下はやはりこの間と比べると随分平和で、どうにも寂しさを感じてしまう。まあ、たまにはこんな日もあるべきなのだろう。静かなのは嫌いではない。

平凡、普遍、普通などといった言葉は聞こえが悪いかもしれないが、落ちていた日というのも大切だ。あまり忙しない日々ばかり過ぎとしては、こちらもお腹一杯になってしまふというもの。ゆっくりとした時間を過ごすのも悪くはない……はず。

そんな静かな廊下を歩き終え、生徒会室前へとたどり着いた私は、左腕についている時計を確認した。その時計が何製なのだとかどのブランドなのだとかそんなことは知らないが、父が買ってきたものなので一応つけている。そうでないと、鼻水やら涙やらを流しながら訴えてくるので仕方がない。ウザさで言えば私の父は遠藤とはるのだ。

その時計に刻まれた時刻は、生徒会にたどり着くにしては少々早い時間だった。けれど、神谷や綾瀬さんあたりならいてもおかしくない時間なので大丈夫だろう。それに、もし本当に誰もいなくてもやることはある。……そう、トラップ仕掛けだ。ベタに黒板消

し落としなんて特に素敵だろう。それに当たるのが遠藤か綾瀬さんくらいしか思い浮かばないのが少々悲しいが。

そんなことを考えながら、やはりたまには早いのもいいだろうと思ひ、私は生徒会室のドアを開いた。

ドアを開けて、まず目に入っただのは舞い上がる書類の数々。

訝しげに目を細めた私の耳に小さく引き攣るような声が聞こえた。その声に視線を合わせてみる。

その視線の先には紙ふぶきの中で、組みほぐれている二人の男女の姿があつた。

組み敷かれている綾瀬さん。

組み敷いている池西。

池西の手はちゃっかり綾瀬さんの胸に置かれていた。

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

綾瀬さんと池西の視線は私に。私の視線は綾瀬さんと池西を交互に行く。

三人とも黙りあつた。

私たちの間に言葉なんていらなかった。

ポケットから常日頃携帯するようになったインスタントカメラを私はおもむろに取り出す。呆然とする二人の前で私はシャッターを切った。

ま、これは別腹ということだ。

「・・・・・・・・ち、違います！誤解、誤解ですから！常磐先輩！」

「・・・・・・・・はっ。って、あっ、そ、そうだ！誤解だぞ、常磐！つか、お前はなんで写真なんか撮ってるんだよ！」

硬直が解けた二人が慌てて弁解をする。しかし、その状態のまま

弁解されても説得力など皆無だ。

「証拠に」

「証拠って何ですか！？ご、誤解なんですよ！あのですね、私が書類を落としてしまつて、それを池西先輩が踏んで転びそうになつちやつて、だからなんとか支えようとして両手で先輩の手を思いつきり引いたら、強すぎたみたいでこっちに向かつて先輩が――」

「じゃあ、その手は？」

「手って……」

池西はその自分の手を見下ろした。

綾瀬さんは見当違いに自分の手を見た後、何か違和感を覚えたのが自分の胸――池西の手が置かれている自分の胸を見た。

そして降りかかる気まずい沈黙。

二人の顔は沸騰したやかんのごとく徐々に赤くなっていく。

またしても数秒間固まつた後、慌てて二人は飛び起きた。

「ち、ち、ち、違いますって！こ、これはその不慮の事故で」

「……」

「い、い、池西先輩からも何か言ってくださいよ！」

「……すまん、綾瀬」

「え？……いや、あの、なんというか、その、き、気にしていませんから」

「……」

「ほら、えつと……」

手で顔を抑える池西に、綾瀬さんはおろおろと手を動かした後、顔を真っ赤にして俯いてしまった。池西みたいな反応をされてしまつては、触られたほうが何か悪いことをしてしまったような気分になるのだろう。ただ、綾瀬さんは気付いていないのだろうか？手で隠している顔からは何やら赤い液体が滴り落ちているのを。

どこまで純情なんだ、池西。

いやいや、それにしても熱い。熱いな。初々しいカップルのようだよ。

「つて、ど、どこ行くんですか！？常磐先輩。口だけの笑いを残したままドアを閉めないでください！」

「お邪魔虫むたいだし」

「そんなことないですから！というか、その手に持ったカメラがものすごく気になるんですけど・・・」

「気にしない。写真部に現像を頼むだけ。その写真を新聞部に提出するだけ」

「とんでもないことを企んでる！？」

「ぐつ、と、常磐。そんなことは、俺が許さん」

かすれたような声に目を向ければ、そこには死にそうになっている池西の姿があった。手は血まみれ。顔も血まみれ。滴る血など死闘を繰り広げてきた戦士のようだ。戦ってきた相手が自分の妄想なのだとしても、どこか畏怖のようなものを感じる。胸を触って鼻血を出す人というだけでもなかなか畏怖すべき存在だと思うが。

「何をする気？」

「決まってるんだろ。そのカメラを完膚なきまでに破壊してやる。綾瀬のため。そしてなにより俺の命のために」

「ふふふふ。そんなこと、させない」

「言ってる。一瞬の隙すら逃さねえからな」

私と池西の間の空気がピリピリと震え始める。

池西が必死になるのは当然だ。この写真が本当に新聞部などに提出されたら、それは全校に知られるのと同じこと。つまり、『唯ちやんファンクラブ』などというバカたちならず、神谷までも知られてしまうということだ。これは死を意味するだろう。

もちろん私とて必死だ。こんな面白いことを逃してしまうなんて私のポリシーが許さない。だいたいこのカメラには他にもいろいろと嬉し恥ずかしのお宝写真が眠っているのだ。破壊されたら私のティンションは地へと落ち、何をしてしまかわからない。恐らく、綾瀬さんに貸しがあったので、それでいろいろと憂さ晴らしをしてしまっただろう。ああ、自分が恐ろしい。

と、いうことで私たちはお互いに負けることなどできなかった。
そう、真剣だったのだ。

綾瀬さんはそんな私たちを、固唾を吞んで見守っている。手出しなどできない雰囲気私たちを取り巻いていた。

そして、私はマッハで振り返りドアを開け、ダッシュの一步を踏み出す。

池西も素晴らしいスタートダッシュでこっちに向かってきた。

それは、一瞬のできごとだった。

なんとすっかり。廊下にも一枚、生徒会室に舞っていた書類が出ていたらしく、私はそれを踏みつけて走り出そうとしてしまったのだ。

もちろん走れるはずなどなく、そこにすっころぶ。こちらに走り出してきた池西も急に止まれるはずがなく、転ぶ瞬間の私とぶつかり、巻き添えで転んでしまった。

地面とキスをするのだけは勘弁なので、なんとか体を反転させ、顔をガード。しかし、一瞬の背中の衝撃と共に痛みが全身を走る。結局、痛いことには変わらない。しかも上に乗っかる池西がなかなか重い。

「・・・・・・・・痛い」

「いたたたた。まあ、結果オーライだな。捕まえたぞ常磐！もう逃がさないからな！」

「無理やりはよくない」

「うつせえ、知ったことか！もう泣こうがわめこうがこっちのもんだぜ！」

「ああ、私の抵抗もここまで」

「だから、何でお前はそう誤解を与えるようなことを・・・・」

「きゃあああああああああああ！」

「うん？」

何やら黄色い歓声が聞こえて周りを見渡せばそこには女子の集団。廊下に倒れ臥していた私たちを取り囲んでいた。

ちなみに池西が私の上に組み敷き、私が池西の下に組み敷かれている。ここだけなら誤解はなんとか解けそうだが、先ほどまでの自分たちの発言。ああ、これはまずい。しかも、自覚があることは私は女顔だ。

ちらつ、と池西の顔を窺ってみると池西は固まっていた。つつけば砂となつて崩れて生きそうである。ドアの向こうから綾瀬さんが顔を出していたが、我が関せずといった表情。どうやらからかいすぎたらしい。因果応報というやつか。

仕方がないので自力で固まった池西の下から這い出でると、周りを囲みしかも何か期待した表情の女子の集団に一言だけ言っておくことにした。

「内緒」

そして私は廊下を歩き、生徒会室から退出していった。後ろからはまたしても歓声が聞こえてくる。

まあいい。今日はもう、帰るとしよう。

その翌日、新聞部に私たちの写真が載ったことは言うまでもない。神谷は恐らくわかつていくせに嬉しそうに池西をからかい、高橋さんはその新聞の写真をくりぬいてうつとりと観賞し、遠藤は本気で「頑張れよ」と言う言葉を残し池西にボコされ、綾瀬さんはお菓子を作ってきて私たちを励まし、香川さんは何やら冷たい表情で私のことを見ていた。

ふう、まったくやれやれだ。

ちなみに私の写真はちゃんと現像した。今の状態で新聞部に持つ

ていつでも私が何やら尋問されそうなので持っていくことはできないが、いつかちゃんと新聞部に提出しよう。人の噂も何日というし、後少しの我慢。

とりあえず、池西のために胃薬でも買ってやるとしようか。

第八話 人の噂は何日まで？（後書き）

ようやく修学旅行から帰ってきました！うう、しかしこれからいろいろと忙しくなりそう。更新は少し遅くなりそうです。更新予定とか立てたほうがよろしいのでしょうか？でもとりあえず、不定期更新ということになると思います。それでもどうか、見捨てず読んでいてください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1462b/>

サブキャラ！

2010年10月8日14時16分発行